

大 博物館だより

1991. 9

No. 6

津山郷土博物館



岡山県重文 銅鐸 勝央町植月北出土 本館蔵

1950年、勝田郡勝央町植月北の丘陵上で、畑の耕作中に偶然発見されたもの。総高29.8cm、身部底長径16.6cm、同短径11.5cm、身部高11.5cm、重量約2,100g。

外縁付鈕式で、片方の鰭の一部が欠失する。発見後一時玩具として使われたため身部両外面中央部は磨滅が著しいが、両端部の状況などから、文様の全体を復元することができる。文様はいわゆる袈裟禪文で、縦横各3個の斜格子文帯により、4個の方形無文区画がつくりだされる。ただし、片面の中央横帯の下には対向鋸歯文帯を加える。鰭から鈕外縁にかけては内向鋸歯文をめぐらす。身部上半部左右両端に各1個の不整形の型持たせ孔が穿たれる。また片面では中央部に1個、他面では下部の鋸歯文帯の部分に2個の不整形の小孔がある。底縁両面右端付近に切り込み、舞部に穿孔がある。内外面とも暗緑色を呈する。銅鐸編年の第2段階にあたり、弥生時代中期に属すると推定される。

銅鐸は弥生時代の農耕祭祀に使用される一種の楽器と考えられている。美作からは他に落合町下市瀬遺跡で高さ6.6cmの小銅鐸が出土している。この他鏡野町で2個の銅鐸が出土したとの伝聞があるが判然としない。

研究ノート

「真金吹く吉備」考

まがねふくきびの中山おびにせる細谷川のおとのさやけさ

この歌は承和の御へのきびのくにのうた

これは、『古今和歌集』巻20所載の著明な歌である。「まがねふく」は「きび」にかかる枕言葉で、製鉄の際、ふいごで製錬炉に風を送るさまを表わすと思われる。古来鉄生産の盛んな吉備地方にふさわしい枕言葉といえよう。一首の意は吉備の中山の山麓をめぐる細流の清浄さを歌ったものであろう。

ところで、幸いにもこの歌には左注があり、作歌の年代や事情が判明する。左注のうち「承和」は仁明天皇の年号。「御へ」は「おほんにへ」の約で大嘗祭のこと。仁明天皇の大嘗祭は、天長10年(833)11月に挙行され、時に備中国下道郡が主基とされた。本歌はこの時備中国から天皇に奉獻されたものである。従って、吉備の中山は備中国内の山となり、備中国一宮吉備津神社背後の山塊をさすことは確実にあろう。

ところが、池田弥三郎は以上の事実を認めた上で、奈良時代以前の吉備の中山が美作一宮中山神社背後の山で、平安朝以降主基が備中国に固定していくに従い、吉備の中山の名称も備中に移ったとする。その論拠は、先の歌中の「帯にせる細谷川」の句が備中中山にはふさわしくなく、美作中山にこそふさわしいとする点である(『古代吉備国論争』上山陽新聞社 1979年)。

確かに「帯にせる細谷川」の句は、地形上、美作中山神社の方によりふさわしいが、『万葉集』巻7の次の歌に注目する必要がある。

大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音の清けさ
「三笠の山」は現奈良市の御蓋山、「細谷川」は能登川のことで、現地の地形は歌の情景にふさわしい。とすれば、『古今集』の歌はいわゆる本歌取にあたり、必ずしも写実である必要はなくなる。よって、池田説は成立せず、やはり通説のように吉備の中山は一貫して備中中山と思われる。

さて、ここで問題にするのは、「真金吹く吉備」の句である。前述のように、「真金吹く」は製鉄を表わす枕言葉であるが、なぜ吉備にかかるのであろうか。いうまでもなく、吉備は古代製鉄の盛んな地であるが、必ずしも吉備が唯一の中心地であるわけではない。平城宮木簡や『延喜式』などによると、鉄や鍬の貢進国は常陸、近江、伯耆、播磨、美作、備前、備中、備後、筑前がある。また、穴沢義功によれば古代の製鉄炉は、肥後、筑前、吉備、近江、北陸、関東、東北に分布の中心が認められる(『日

本歴史地図』原始・古代編下 柏書房 1982年)。このうち、筑前、吉備、近江の各地域が古墳時代に溯り、他は主として奈良時代以降の遺構である。さらに、大沢正己の古墳出土鉄滓の分布調査によると、九州84例、中国50例、近畿15例、関東3例、計152例のうち、福岡県79例、岡山県38例の2者で全体の約80%を占めている(『古代鉄生産の検討』古代を考える会 1984年)。このように、古代の製鉄は列島内のいくつかの地域で盛行しており、古墳時代に限っても少なくとも北九州、吉備、近江の3地域に中心があることがわかる。では、なぜ真金吹く筑紫、真金吹く近江とはいわず、吉備だけがいわれるのだろうか。そこには何か特別の歴史的事情があるのではなかろうか。

そこで、筆者の注目するのが『日本書紀』にみえる吉備の山部に関する伝承である。すなわち、清寧天皇即位前紀(479年)に、星川皇子の反乱の際、朝廷は吉備上道臣氏が皇子を救援しようとした行動を罪して、その領有していた山部を奪う記事がある。また顕宗天皇元年(485年)4月丁未条には、前播磨国司来目部小楯が後の仁賢・顕宗両天皇兄弟を発見した功績により、山官に任ぜられ、山守部の領有を認められた。そして、山部連の氏姓を与えられ、吉備臣を副官とされたとの伝承がある。二つの記事は密接に関連する内容であり、前者で上道臣から奪った山部を、後者で山部連に与え、吉備臣(上道臣)は改めて副とされたと解釈される。一方で山部、もう一方で山守部とあるが両者は同じものとみてよいだろう。このような伝承はもとより実際の歴史的事実ではなく、山部連氏と山部の起源伝承である。しかし、5・6世紀のある頃、大和政権によって吉備地方に山部が設定され、山部連がその伴造、吉備臣がその現地管掌者に任命されたことは史実として認められると思う。

では、ここでいう山部とは何か。山部については、従来朝廷直割の山林を管理する集団とか、山の幸を宮廷に貢納するを職をするとか考えられているが、筆者はこれを製鉄集団とする山尾幸久説を支持する(『日本古代王権形成史論』岩波書店 1983年)。とすれば、吉備の山部とは大和政権所属の吉備地方の製鉄集団ということになる。かつては、吉備の古代製鉄といえ、美作を中心とする山間部が圧倒的に優位と考えられていたが、最近備中の総社市内から古墳時代の製鉄遺跡が多数検出され、吉備中枢部でも製鉄が盛んであったことが明らかとなった。

とすれば、古墳時代の吉備の製鉄集団の少なくとも一部は、大和王権の直轄下にあったことがわかる。大和王権にとって、吉備の鉄とは他地域とは異なり、特別の関係にあるものである。「真金吹く吉備」とはこのような吉備の製鉄集団を讃美する言葉と思われるのである。(湊 哲夫)

'91 博物館日誌から

●企画展「古絵図の世界」 3.16～5.16

彩色豊かな絵図や絵画は、古文書だけでは知りえない江戸時代の姿を今に伝えています。この展覧会では、江戸藩邸図から村絵図まで津山藩関係の絵図資料37点を出陣し、近世社会のしくみなどを考えました。

●第10回美作の文化財めぐり 3.21

加茂町方面。万燈山古墳やキナザコ製鉄遺跡などの文化財を見学しました。参加者61人で盛況でした。当日は15キロ程のコースを歩きましたので、皆さんさすがに疲れた様子でしたが、天候もよく楽しい早春の1日でした。

●文化財講座「鉄と古代社会」 5.16～7.11

県内の埋蔵文化財関係者を講師にむかえての連続講義。「真金吹く吉備」と歌われるように、吉備地方は古来製鉄の盛んなところとして著名です。講座では、久米町大蔵池南製鉄遺跡、最近あいついで調査された総社市内の製鉄遺跡などを紹介しながら、古代の製鉄の実態を考えてみました。

●古典講座「魏志倭人伝を読む」 5.17～

弥馬台国は大和か九州か、女王卑弥呼のシャーマニズムとは。古代史の宝庫「魏志倭人伝」の謎にいどみます。7月まで3回を終えました。来年3月まで全9回の講義です。毎回するどい質問が出るので、講師は汗だくです。

●古文書講座「戦国文書を読む」 5.22～

当館の人気講座です。今回は美作の戦国時代の文書をとりあげています。美作は尼子や毛利など戦国武将が抗争をくりかえしたところでした。来年3月まで9回の講義ですが、いよいよこれから佳境に入ります。

●第11回美作の文化財めぐり 6.9

奈義町方面。諸神社、有元城跡、元禄時代の道標などを訪ねました。当初は6月2日に予定していましたが、例年より早い梅雨入りのため初めての延期となりました。4月に友の会が発足し、その最初の例会となりましたので、はりきって出かけたのですが、当日は朝から今にも降り出しそうな天候のせいか、参加者は19人と過去最底でした。それでも、中味の濃い見学会となったと思います。10キロ程の徒歩コース。

●展示室・収蔵庫の燻蒸 6.16～6.20

博物館資料を永久に保全することは博物館の最大の任務の一つです。せっかく寄贈や寄託された資料



夏休み子供歴史教室風景

を傷めてしまつては、博物館失格です。このため、館では温湿度、照明などあらゆる資料劣化の防止策をこうじています。燻蒸は、このうち虫や細菌による被害を防ぐため、専門業者に委託して毎年6月頃に実施しています。まず、すべての展示室と収蔵庫を完全に密閉し、エキボンという猛毒ガスを24時間内部に充満させます。それからガスを除毒しながら、2昼夜にわたってガス抜き作業を行います。この間は、ガス濃度の点検や資料保全のため、館職員と業者が24時間警備につきました。

●夏休み子供歴史教室「弥生土器をつくる」 7.25、7.26、8.20

弥生土器のつくり方を復元しながら、当時の技術や生活を学習しようとするものです。小学校5、6年生を対象とし、30人が参加しました。まず、粘土で砂をよく混ぜながら土器の形をつくります。土器内外面についている刷毛目やへら削りなどの技法も再現していきます。2日間かけて作った土器は1か月近くよく乾燥させました。そして、いよいよ8月20日に、近くのグラウンドで焼いてみました。粘土は市販のもの2種類を使いましたが、結果は、一種類の方がほぼ全滅でこなごなに割れてしまいました。粘土の選定のミスでした。夏休みの宿題にと考えていた子供たちにはすみませんでした。また来年頑張ってください。

新刊出版物のご案内

『愛山文庫目録』津山松平文書の部（津山郷土博物館紀要第3号）

国元日記・江戸日記・町奉行日記など元禄から維新时期にいたる津山松平藩の藩政文書の目録。

領価 1,100円（郵送希望者は送料260円を添え現金書留で博物館まで申込むこと）

村、むら、ムラ—あるいは、村落。現在の私たちは、歴史上の“村”を表現するために、様々な表記を用います。これは、いったいなぜなのでしょう。どうして、このようなややこしいことになるのでしょうか。

歴史の世界では、村というのは時代によって、地域によって、また歴史家の歴史観によって多種多様な姿を現します。その違いを表現しようとして、あるいは、なかなか実態の分からないもどかしさから、括弧つきの村という表現を使用することが多くなるのです。

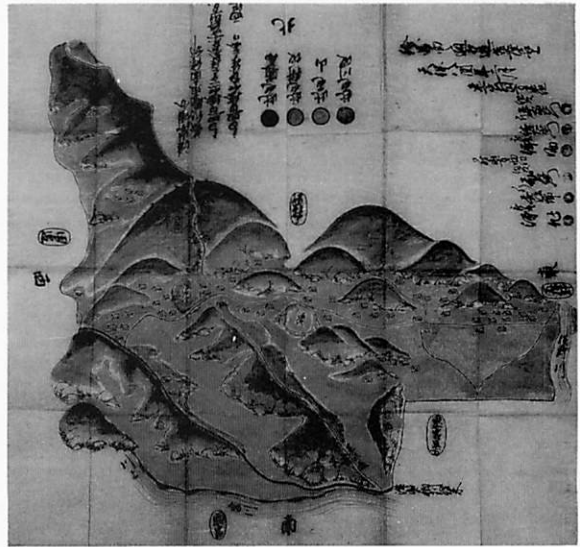
では、時代を限定して、近世の村と言った場合はどうでしょうか。これも、やはり単純ではありません。近世以前に、元々が自然発生的に形成された村の共同体や、そこに住む人々の生活領域は複雑であり、周辺の村々との入り組んだ関係が存在しています。そうした事をおおよそ取り込んで、支配権力によって設定されたのが、近世の村なのです。この「おおよそ」というところが問題で、行政的な区分としての村と、地域の生活実態としての村とが、一致しないこともしばしばあるのです。そのため、行政的な村に対して、実際の生活上の集落を村落として区別する事もあります。

となると、村の景観というのはどういう意味なのか、ということになるのですが、先ほどのたてまえと本音的な矛盾に加えて、地理的景観と心理的景観が考えられます。

地理的景観というのは、実際に見たままの風景ですが、心理的景観というのは、村に生活する人々の生活観の現れとも言えるものです。生活の中心である居住地域、農作業を行う耕作地域、山や川や原といった周辺地域は、地理的なものとしても区分できますが、そのほかにひとびとの心の境界域として存在しています。そうしたことが、ムラ・ノラ・ハラといった表現にも現れてきますし、村の外の世界との接点である村境の地蔵や、辻の持つ特別な意味などにも関係してきます。

こうした一般的な問題点と共に、津山周辺では森藩時代の「山上がり」による特異な景観も見られます。河辺の上之町などは、街道整備とあわせて、町並を形成していますし、川崎村は居住地域が村外に設定され、実際には、川崎村の住人が集団で野介代村に住んでいる様なことになっています。

このように、様々な景観の中で村の生活が営まれ



東一宮山方東組絵図 本館蔵

ていたのですが、村の生活という、なんとなくイメージとして分かりきっている、と思っている人が多いのではないのでしょうか。しかし、実際はそうではないのです。村の生活は、生業の面からだけでも、田や畑での農作業だけで成り立っていたわけではありません。

城下町に接している、街道沿いの村では、大きな商売を始める者もいます。周辺部の街道沿いでは、旅人相手に、酒・茶・わらじ・菓子などを商ったり、山の村には獵師、大きな川のある村には船持や船頭がいたりします。もちろん、こういった地域的な特徴を持った職種の他に、桶屋・大工・屋根葺といった職人も住んでいました。しかし、彼らもまた村に住む百姓だったのです。

また、村の生活という牧歌的な言葉には似合わず、実際には常に平穏な日々が続いていた訳ではありません。水や入会地をめぐる争いもありました。村々では厳しい掟を定めて、相手の村と激しく対立することもあったのです。

今回の企画展では、そうした近世の村の生活を、景観と合わせて考えて見るためには、格好の資料である村絵図を中心とした展示を計画しました。古文書から得られる知識と共に、豊かな想像力を駆使して、近世の村の生活に思いを馳せていただければ幸いです。

<博物館入館案内>

- 開館時間 午前9:00~午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日~1月4日 その他
- 入館料 小・中学生 100円(80円)
高校・大学生 150円(120円)
一般 200円(160円)
※()は30人以上の団体

大 博物館だより No.6

発行年月日 平成3年9月30日
編集・発行 津山郷土博物館
〒708 岡山県津山市山下92
TEL (0868) 22-4567
印刷 松栄印刷株式会社

大は、旧津山藩の楯印で剣大といい、現在津山市の市章である。